

継続を力にかえて

清水 聡子

市立札幌病院皮膚科部長

卒後30年が経過、次男が大学を卒業し、長い子育ても終わりかと感慨深いものがあります。卒後4年目に長男を授かって以来、仕事と家庭の両立にわき目もふらずに突き進んだ毎日でした。最初の産休明けの際は、生後8週目の長男を人に預けて復帰してよいものかと悩みましたが、超ポジティブで皮膚科の先輩でもある夫から強く背中を押され、以来、現在までずっと基幹病院の常勤勤務医生活です。

幼児2人の子育て中はあまりにも忙しく、まったく余裕はありませんでしたが、共働きで得たお金はすべて家事の時短と家族の幸せのために使い、年に2回は家族で海外旅行をし、たくさんの思い出をつくりました。不思議なもので、忙しいがゆえに集中する術を身につけ、いまでは不可能な、信じられない速さで仕事をしていました。家では言葉の通じない怪獣(幼児)たちと格闘するわけですが、病院で責任をもって診療をすることで自己肯定感を取り戻せました。保育園と病院の往復の毎日でも、学会発表の種を頑張って探し、年に最低1編の英文論文執筆を自分に課しました。症例報告であれ、論文にコツコツと仕上げていくと、少しずつ自信がついていきます。英文論文は、海外の学会での発表につながり、世界の名だたる皮膚科医と交流をもてるというのも励みになりました。よき指導者に恵まれ、学位も取得でき、研修医や看護学生の講義も続けています。

子育ての経験は、患者指導はもちろんのこと、後輩の指導にも反映されます。私はカリスマ的なリーダーシップをもつようなタイプではないので、教育については試行錯誤の連続ですが、ユニークで予測のつかない行動をする長男や、激しい反抗期を経た次男を育てた体験は、研修医とのやりとりにも役立っています。一方、いまでは会社員になった息子



たちの仕事の愚痴にも、上司としての経験からさまざまなアドバイスができるのは私の密かな自慢です。

“ワークライフバランス”というと、仕事と切り離して充実した私生活が別に存在していなくてはいけないように思いがちですが、仕事も私生活もどちらも相乗効果で高めていけるなら、これほどよいことはないと思います。

最近の若い医師は、われわれの世代に比べ、夫婦の役割分担がより柔軟で、お互いに助け合いながら働いているようです。その分、男性医師も子育て中は忙しく、自分のキャリアと私生活の両立に悩んでいる方もいらっしゃるかもしれません。多忙な医師生活の中で男性も女性も疲弊しないためには、自分の成長を実感できる機会があることが大切でしょう。忙しくても学会発表、論文執筆は大切に、そして、忙しすぎて仕事の成果がみえにくいときには、キャリアと子育ての同時進行はそれだけで素晴らしい社会貢献である、と考えれば、自信がもてるのではないのでしょうか。私も、継続を力に、これからも皮膚科医生生活をエンジョイしたいと思います。